

## 医療社会学的見地からみた、僻地住民の

### 健康認識と、大衆保健薬の浸透状況

― 栃木県那須町、養沢地区の事例から ―

緒 言

成 田 恭 隆

医療社会学 *Medical sociology, medicine sociology* の概念は、医療領域の展開につれ、そこに社会学概念が導入されたことによって、生来したものである。近年この分野への世人の関心が高まり、次第に注目されるにつれ、医療社会学そのものの各方面での研究が行なわれるようになった。しかし、未だ医療社会学としての発足が新しいために、社会的要請が強いにもかかわらず、いまだに医療社会学に対する考え方も、医学関係者の主唱する *social science in medical* と、社会学関係者の主唱する *social science of medical* と、二つのニャンスを異にする立場から志向されている現状である。

筆者は、その内容を *social science of medicine* と規定して研究、調査を進めてきた。

医療と云う意義についても狭義の医療行為内容を医療技術とは規定せず、広義の立場から、保健活動全体を包含する *Sociology of health* の考えて研究を進めた。すなわち、*Social scientific approach for problem* として、社会現象の中に提起される各種の医療問題の分析と説明にあたった。次に医療社会学を構成する方法の内容から筆者は、「保健活動の社会学」を今回の調査にあたって強調することとした。

すなわち、社会集団に於ける種々の因子、住民の健康認識、保健活動の分析を目標として、調査研究を進めた。

## 僻地への医療社会学的アプローチ

医療社会学の研究領域として、地域医療の問題がある。特に僻地に於ける医療問題は、医療機関の不備、医師の不在と云った慢性的歴史的な事情が山積している。

これら、僻地医療問題のテーマは、住民の福祉を中心として論ぜられ、医学に於いては社会医療に重点が置かれて、実施医療としても、実施されてきた。また、健康科学に於いては、住民の意欲の向上と、認識の確立を目標として、活動が行なわれている。それは、研究者の一方的な調査、研究に終るものでなく、それらが、住民の賛同のもとに、総合的に企画され、住民の生活に反応を資するものでなければ大きな意義を見出すことはできない。まず、医療社会学の研究の一過程として、僻地住民の保健活動として、大衆保健薬の利用状況を調査、分析することにより、その内部へのアプローチを試みた。僻地にかぎらず農山村に於いては、昔ながらのいわゆる家庭常備薬の戸別訪問販売の歴史がある。勿論、それらの利用も医薬品の進歩と、また、マスコミの進歩と相まって、圧迫されたとはいえ、未だに習慣化され、それらの薬剤が家庭に置かれ利用されている例は、決して少なくない。

### 〔一〕 調査地及び、調査対象

調査地は、栃木県那須郡、那須町、伊王野、蓑沢地区とした。

蓑沢地区は、栃木県北東部に位置し、旧奥州街道沿の農業主体の農山村であり、北は福島県白河市、南は、栃木県黒磯との交通路にあたり、自動車等による交通事情も次第に整備されていく傾向にあり、都市化現象も急速に進展している。また、住民一般の医療認識も、マス・メディアを通じ、浸透している。このような都市接近の傾向の強い僻地と云う意味で当地区を調査地として選定した。

調査対象は、蓑沢地区住民とし、特に各家庭に於ける主婦を対象の中心として調査を実施した。対象となった

家庭は、二二八戸であつた。その内、一六二世帯に於いて調査を実施した。全体的に調査すべく、調査地区内にある家庭すべてに、個別訪問による調査を実施したが、留守その他の理由で実施できない家庭があつたので、一六二世帯にとどまつた。

図1 蓑沢地区の図

② 産業

## 〔二〕 調查地概況

① 人口及び世帯数

一一一七名、男、五四四名、女、五七三名、世帯数二二六世帯である。年令別人口は、図2の人口ピラミッドで示すように、全国の僻地でみられるように、若年層の離村傾向、労働人口の老令化現象がみられ、二〇代、三〇代の人口が極めて少ない。

男	女	計
544	573	1,117

表 1 人 口

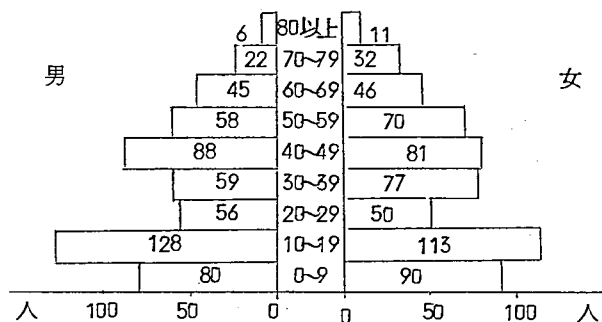


図2 人口構成

#### ④ 環境

自然環境は、山間地と云うこともあり、極めて恵まれている。しかし、なお文化的施設の面では、まだ十分とは云えない。

衛生環境についても、上、下水道が不完全であり、住民の利用する飲料水は、井戸水が七九・〇%、湧水が一九

#### ⑤ 交通

住民の利用する主要交通機関は、バス、自動車、自転車である。バスの運行回数は、隣地区伊王野へ、日に七本、隣接する福島県白河へ、日に三本と極めて少ない。しかし、多くの家庭に於いて、自動車、バイク、自転車が多く利用されている。

は、農業が主体でなく、また、林業が専業でもなく、その季節によって変わる。商業(三・八%)、工員(一・五%)、その他(一〇・〇%)となっている。農業に従事するものの多くは山林業を兼業しているので比較的生活は安定している。しかし、一部の豊かな資源所有者の経営する、製材業又は、林業に従事する労働者は、耕地が少ない。山林も所有していないので、日雇として生活している。しかし、最近、黒磯方面に、労働力を求めて、大企業や、その工場が進出して来たので、主婦などがパートタイムとして働いている。

・一％、川の水が一・九％であり、従来これらの飲料水の検査や消毒はされていない。ゴミの処理なども、部落の中を流れる三蔵川に投棄処理している現状である。また、この川の中を、人口的に区切りをつけ、児童の水泳場として活用している。

糞尿などの処理は、従来は、各家庭に於いて、畑などに肥溜槽を作って処理していたが、現在では、肥料として使用することが極めて少ないので、その処理を町役場に申し入れている現状である。このように、生活環境は、恵まれているとは云えない。

### ⑤ 社会構成

部落の中に於ける社会的構成の変化は、家族制度にみられる。すなわち、従来農村にみられた「家」中心の制度も、若い世代の都市への転出や、結婚による世帯作りのため、当地に於いても、必然的に変化して来た。部落内の行政面も、「寄合」の型態から最近では、各地区から役員を選出し、さらにその中から各々の運営に必要な委員を選出している。

この中に、衛生委員が、各地区や、巡回の保健婦などと連絡を取っている。また、そのほか青年団などの組織活動も、青年会、婦人会、若妻会を作り、料理の講習会や、年に二回のレクリエーションとして、ソフトボール大会や、バレーボール大会などを催し、住民の親睦を目的として、小学校等を利用して盛んに行なわれている。

### 〔三〕 調査期間

昭和四十六年六月上旬に一週間予備調査を実施し、七月下旬に集中的に調査を実施した。

本調査は、前年度に引続き、東京教育大学体育学部、健康教育学科、健康管理学研究室によって、大塚教授以下教室員によって、僻地診療と、住民の健康認識の調査が行なわれ、筆者の調査も併行して行なったものである。

#### 〔四〕 調査方法

調査方法は、面接法により、調査員が個別訪問をし、一世帯、一調査として行なった。調査の主要項目は以下の通りである。

- 一、大衆保健薬の浸透状況
- 二、大衆保健薬の入手先
- 三、大衆保健薬入手の動機
- 四、利用医療機関

#### 〔五〕 調査結果

- ① 大衆保健薬の浸透状況  
浸透状況については、調査対象家庭一六二世帯中、一五〇世帯に大衆保健薬が備えてあり、九〇%を示してゐる。

その内分ける、表二の如く、薬局、薬店のものが二八%、訪問販売の薬剤が七八%になっている。また、家庭によっては、訪問販売と薬局薬店からのものを、両方備えているので一〇〇%を越えている。しかし、浸透状況が良いのは、医療機関まで遠いため薬剤を買置きすると、訪問販売の販売員が置いて行くためと思われる。また、多く利用される薬

n=162

薬 局 薬 店	28%
訪 問 販 売	88%

表2 薬剤の利用数

n=162

薬 品 名	%
胃 腸 薬	95%
解 熱 剤	74%
栄 養 剤	84%
マ ー キ ュ ロ	96%
軟 膏	91%

表3 利用薬剤の種類

n=162

薬 局 薬 店	28%
訪 問 販 売	62%

表4 薬剤の入手先  
及び入手の動機

剤の種類は、表三に示すように、胃腸薬、等の消化剤が多く、次いで解熱、鎮痛剤を示している。

## ② 大衆保健薬の入手先

薬剤の入手先は、表四の如く、訪問販売の薬が最も多く、歴史的にも古くから販売員が部落に入っているためではないか。薬局、薬店から入手する薬剤の購入率は表の上から考えると少ないが、必要に応じ薬剤師の指導によって購入されている。その利用度は高いと考えられる。訪問販売の薬剤の利用の程度は明確でなく、極めて受動的に常備している程度である。

受動的であると云うのは、訪問販売に依って、販売員が置いて行く薬剤を、時に応じて利用する面からは、常に消極的である。

なお、マスコミ等のコマースの影響が意外と低いようであった。この点については今後の調査によって明らかにしたい。

## ③ 入手の動機

入手の動機については、前述の如く、消極的である。この点については、訪問販売の薬剤が多く浸透しているところに見られる。

訪問販売の薬剤が歴史的にみて、戦前から入っている事と、薬剤を購入する目的で薬局、薬店に行くことが少ないためである。

入手先の項に於いても、必要に応じて買う事が明らかになっているが、これも、薬剤を購入する目的によって町に行くのではなく、他の目的によって、町に出たついでに薬剤を買ってくる場合が多い。薬剤の必要にせまられて、薬局、薬店に行く事は極めて少くない。

このような事から考えて、薬剤の入手の動機は、受身的であるが、薬剤を常に置いておく必要があると云う認識は高く。

この点は、この部落の住民の健康認識に関する調査の結果と一致する。

この部落の住民の健康認識は高いが、保健活動がやや消極的であると云う、健康認識調査の結果として出ている点とを考えると、薬剤の入手の動機の受身的な事も符合する。

#### ④ 医療機関との関係

医療機関との関係について、筆者は、大衆保健業が浸透していることと、医療機関まで遠いため、必然的に大衆保健業に依存していると思われる。しかし、部落から、約4 Km離れた伊王野に、町立伊王野診療所と、河島医院の二診療所がある。

伊王野診療所は、現在、入院と、外来診療が行なわれ、医師一名、看護婦二名によって運営されている。河島医院は、外来診療のみであり、河島医師の健康上の理由により、午前中のみ診療し、午後は休診となっている。

この二診療所を住民が最も利用している。距離的には、約4 Kmと遠いが、自家用車を利用しているので時間的には近いので利用されている。また、伊王野の二診療所の内で、河島医院の利用度が高いのは、河島医師が土地の出身者であり、開業年数が長いことにあると思われる。

伊王野診療所は、昭和四十六年五月に、青森県北津軽郡の市浦村より来た、台湾人の遊医師が診療に従事している。赴任間もないため、利用者数は少ない。しかし、他の部落の住民は、多く利用している。

また、白河市にある白河厚生病院の利用者は、伊王野まで遠く、むしろ白河市に近いので利用されている。しかし、白河厚生病院を利用したいと住民の多くは望んでいる。

白河厚生病院は、この地区内で唯一の総合病院である。都市のように、医療機関が身近に多い地域は、その時によって、受診する診療所や病院を変えることが出来るが、医療機関が少

伊王野河島医院	33%
伊王野診療所	10%
白河厚生病院	7%

表5 利用医療機関



なく、しかも、遠隔の地であるような僻地にあっては、住民は、日常の健康に自ら対処しなくてはならない場合が多い。そのために、心の支えとして、常備薬を置くようになる。また、医療機関の利用に限界があるため、住民は、自分の健康に関する認識が高くとも、保健活動が消極的である点については、単に、農山村特有のものとして、かたづけられない。しかし、僻地に於ける医師の不在は、当地区だけではない。このような地区の住民の健康問題は、目先の施策で解決はつかない。また、医療機関を充実しても、運営等の問題が多く残される。このような問題について、今後、調査、研究を進めることにより明らかにして行きたい。

## 考 察

僻地の医療問題の重点は、医療機関の不備、医師の不在であるが、住民の健康認識、保健活動なども考えなくてはならない。

社会医療保障等の医療行政の充実は、急務であるが、医療制度と共に、住民個々の健康認識を高める事もある。医療社会学に於いては、両者の問題をいかに一致させるかも、その研究領域であると考えられる。

さらに、人間の健康について広く考える必要がある。すなわち、健康は個人のみによって、保持、増進されるものではなく、その人間の社会環境等によって作用される。或る地域に於いては、その社会環境が劣悪なるがために、健康が破壊される事があり、また、社会環境に恵まれていても、自己の健康に対する認識の不足によって、健康を害する人もある。しかし、現代に於いては、その環境が劣悪なるために、健康の保持、増進が困難になっている。僻地に於いては、生活環境の不備、医療機関の不備、医師の不在などがあり、また、住民の健康認識にも問題がある。

大衆保健薬の浸透状況に関する調査結果から考えても、今なお、昔ながらの訪問販売の薬剤が浸透し、これに依存している者が多い。これは、歴史的な根強い習慣の他に、無医地区に等しい地区に於いては、医療への不安

があるため、自らの慰めのために、家庭薬として常備しているものもある。

現今では、自動車の普及、交通機関も整備されているものの、相かわらずの現状である。

売薬の利用価値について考えても、薬剤がある程度の安心感から利用されているとすればこの状態は、今後とも長く続くと思われるが、薬局、薬店から購入される薬剤も、今後現在以上に種々のものが家庭に備えられると考えられる。また、保健活動も、年々僅少の都市化現象がみられるものの、まだ消極的な域を出ていない。今後、この地区には、整備された医療機関の設置と、健康認識の啓蒙が必要とされる所以である。

## 結 言

僻地に於ける大衆保健薬の浸透状況の調査から、僻地の医療問題へのアプローチを試みた。この調査の他に、本調査期間中に、調査地、蓑沢部落にある、美野沢小学校に於いて、児童、成人を対象とした健康診断を実施した。診療活動の方は、連日盛況で、大塚教授以下、診療班、臨床検査班、は大変であった。このように、僻地住民の医療への関心は強く、僻地医療問題について考えさせられた。

しかし、受診者は、六〇代以上の老人であり、三〇代、四〇代の人々は、何分かの診療を受けるより、日雇の収入が第一と受診しなかった。これは、農村、又は、僻地診療の実施の上では、常識のこととされている。そのため、夜映写会を行ったり、ピラ等による宣伝を行なった。この点については、農村医学の著者若月氏も、僻地診療に於いては、このような活動も必要であると述べている。このような点から考え、地域社会に於ける保健活動は、単に、実施医療だけでない。住民の健康行動と、認識に影響する社会的要因等の研究を、社会学概念の導入により進めるのが、医療社会学の研究である。

田中 恒男 医療社会学 学文社 一九六八

安食 正夫 医療社会学 医学書院 一九七〇

詫間 晋平・大久保貞義 単調労働と医療社会学

大塚正八郎・成田 恭隆・藤沢 邦彦

帝国地方行政会 一九六八

僻地住民の健康管理に関する基礎的研究 ― 栃木県那須町衰沢地区の事例 ― 東京教育大学体育学部、研究紀要 VOL 11 一九七二

社会学科、第一回卒

東京教育大学、体育学部健康教育学科

健康管理学教室

指導教官 教授 大塚 正八郎